

「神からの悪霊？」

聖書を読んでいると、「不思議だなあ」と思う箇所が度々出てきます。常識とはかけ離れた、にわかには受け入れがたい言葉に出会うことがあります。例えば、列王記下 2 章 23～24 節には、預言者エリシャの次のような物語が書かれています。「エリシャはそこからベテルに上った。彼が道を上って行くと、町から小さい子供たちが出て来て彼を嘲り、「はげ頭、上って行け。はげ頭、上って行け」と言った。エリシャが振り向いてにらみつけ、主の名によって彼らを呪うと、森の中から二頭の熊が現れ、子供たちのうちの四十二人を引き裂いた」。母教会の聖研祈祷会で、この箇所を学んでいた際、一緒にいた友人が「そんなアホな！」と言っていたのを今でも覚えています。エリシャさんのこの物語を、果敢にも礼拝説教で用いることは、きっとあまり無いかと思います。聖書研究だから、やむを得ず触れざるを得なかったというのが正直なところでしょう。「聖書」と言うと、その名の通りの「聖なる清らかな書」というイメージが伴いますが、その実、書かれていることは時に血生臭く、時に残酷で非情であることも多いです。

聖書を単なる「良い話が詰まったもの」として見るなら、失望してしまうでしょう。自分の聴きたい言葉だけを聖書に求めるなら、裏切られたと感じることもあるかも知れません。聖書は、私たちにとって都合の良い書物ではありません。むしろ、難解で、挑戦的で、見たくないものを見せつける、そんな側面があります。日常生活において、厳しい現実を見せられるよりも、さらに過酷な人間の性質、暴力性や身勝手さが聖書には記されています。時には、そうした聖書の、聖書らしからぬ箇所に目と心を留めて、向き合ってみることも大事だと思います。私たちは怠惰でお気楽な夢想家ではなく、この現実世界の中で、多くの人と関り、神様の御言葉を宣べ伝えるという働きを負

っています。その働きを担う上で、人間のほの暗いところ、ズルいところ、しかし、赦し、愛すべきところを知っておくことは重要です。

また、神様の示される御業の多様性にも気付いていたいところです。神様は、私たちの都合の良い「便利屋」ではありません。私たちにも自分の見通しや目論見があるように、神様には神様の御計画と御心があります。それは、必ずしも私たちの想いと一致するわけではありません。神様は、私たちの想いと願いを大きく超えて、御計画を実行される方です。御心を示される方です。私たちは、その厳然たる神様の御考えと御業を前にして、一被造物として謙虚に生きるしかありません。ただ、その謙虚な生き方とは、「どうせ上手く行かないし」という諦めの境地ではなくて、「私には、よく分からないけど、神様がどうにかしてくれるだろう」という「委ねの境地」です。神様に丸投げ。大いに結構。むしろ、自分の力量を超えた部分を、無理やりに繕おうとせず、潔く、勇気を出して、神様に委ねて祈る姿勢こそ、閉塞した人生に新しい希望を与えられるでしょう。

聖書を読んでいて理解に苦しんだり、神様と向き合う中で思い通りにならないと痛感したりすることがあります。でも、その経験は、自分の小さな枠組みを乗り越えようとしている足掛かりであると言えます。最初からスッと腑に落ちるものばかりを見聞きし、取り入れていても、未来への展望は見込めません。時々勇気を出して、ちょっと消化に悪そうなものも食べてみる、理解に苦しむものを頭に入れてみる。その小さな積み重ねの先に、自分一人では到底見つけることのできないような、新しい発見、新しい恵みがあるのだと思います。

ということで、今日も「不思議だなあ」と思わずにはいられない聖書箇所を、神様の御言葉を一緒に読んでみたいと思います。「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう」って、何ですか、それ？って感じですよ。どんな意図があって、この御言葉は、今、私たちの目の前に示されたのでしょうか。

今日の登場人物である「サウル」とは、イスラエル統一国家の初代国王です。主なる神様を信じて生きる、信仰共同体であったイスラエルを、歴史上はじめて国家としてまとめ上げたのがサウルさんです。だから、このサウルさんはもっと人気を集めて、もっと評価されるべき存在だと言えるのですが、聖書の中では、より優れた王様として名高いダビデさんの引き立て役としてのイメージが際立っています。今日の聖書箇所も、その大筋だけを見るなら、苦しむサウルさんを癒し、出世する若きダビデさんというお話です。神様の御心も、また、聖書の興味関心も、サウルさんを離れて、完全にダビデさんに注がれています。後世における評価も、ダビデさんが群を抜いています。

しかし、今日の聖書箇所において、弱々しく老いさらばえているように見えるサウルさんは、とても大切なことを、身をもって私たちに教えてくれています。それは「神様は悪いこともする」ということです。先ほども取り上げた、今日の説教題にもなっている「神からの悪霊」という現象は、この現実世界の様子を的確に示しています。「なぜ愛である神様が支配されている世界に、悪いことが起こるのか」「なぜ神様は正義を行われぬのか」「なぜ不幸や悲劇は無くならないのか」。こういう神様やキリスト教に対する疑問は枚挙に暇がありません。キリスト教信仰に生きる人であっても、大きな悲しみを経験すると、神様への信頼が揺らぐこともあります。「いつも喜んでいなさい、感謝しなさい」とは行かないのが人生の本当のところですよ。

だから、思い切って「神様は悪いこともする」と考えてみましょう。「神様は、私たちの都合や願いを無視して、悲劇や不幸をもたらすこともある」と。それが神様なのだと。「いや、だったら、そんな神様、要らんし」と言われてしまいそうですが、でも、仕方ない。だって神様は、この世界を全て支配される方であり、あらゆる災害も、不幸も、悲劇も、すべて御業であると言えませぬ。私たちが安心したいがために「この悲劇に神様は関係しておられない」とか「この事故は神様の御業の外である」とか、そう考えるのは、とても身勝手ですね。順調な時には、「全てを支配さ

れる神様に感謝」と言い、不調な時、思い通りに行かない時は神様の関与から目を背けるという。

「神様がいるなら、なんでこんなつらいことが起きるんだ」という非常に素直な訴えに対して、私たち信仰者は、どんな回答ができるでしょうか。一つの考え方ですが、こんなのはどうでしょうか。

「神様は悪いこともするんだよ」・・・。「ただ、悪いことも、神様の御業なら、ちょっと安心しませんか？」・・・。「だって、その不幸や悲劇が、神様の力の及ばないところから来たものなら、神様って無力ってことじゃないですか」・・・。「神様にも、どうしようもできないことがある、ってことじゃないですか」・・・。「それって不安じゃないですか」。

「神からの悪霊」というサウルさんが経験した出来事は、実は、日常の悪い事も、悲劇も、不幸も、ぜんぶ神様の管理下にあって、すべて神様が制御、コントロールされているんだよ、ということをお教えます。どんなに大きな災難に出くわしても、絶望し、倒れ込むような状況に置かれても、私たちに命を与え、育み、慰め、励ましてくださる神様が、その全てを制御し、導かれている。私たちは、どんな時でも孤立せず、希望を失わず、最悪の出来事でさえ御心のままに翻し、次に繋いでくださる神様を思うことができる。「神からの悪霊」と言うのは、実は福音なのです。良き報せです。私たちが被り得る全ての悲劇に対して、神様は御心を巡らせ、時に適った解決策と癒しの方法を与えてくださる。サウルさんに、ダビデさんが与えられたように、ですね。

神様を信じ、その逃れることのできない御支配を受け入れることで、私たちは自分の限界を超えたところにある、希望を見つけられるようになります。目の前の悲劇が、手綱を解かれた凶暴な狼ではなく、よく躡けられた従順な羊であると思えるなら、私たちはもっと自信をもって生きて行くことができるでしょう。何が起こっても、それは全て神様の御業であるが故に、そこに愛と希望が常に置かれている。

そう信じて、今週も堂々と生きていきましょう。何があっても、神様が導いてくださいます。そ

の確信が、私たちを力づけ、そして、キリストの良き香りを纏わせるでしょう。最後にお祈りをします。

神様。

今日も、あなたに招かれて、この礼拝堂に集えたことを感謝致します。あなたは、私たちには思いも及ばない、数々の御計画を、御業を携えておられます。それらは必ずしも私たちの願いや想いとは重ならないかも知れません。しかし、あなたを慕い、信仰を告白する私たちは、どんなことが起こっても、そこに御心が通い、あなたの御意思が貫かれていることを信じます。悪さえも従え、意のままに操るあなたに、私たちは信頼を置いて、この世の悲劇や不幸をお委ね致します。どうか、私たちの讃美の声がより大きく、広く響き渡るよう、あなたが全てを整えて、豊かな祝福を置いてください。今日から始まる1週間も、あなたの導きの中を、安心して堂々と歩むことができますように。

このお祈りを大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。